

よりなん 交流会8/30、講座10月～12月 まちの生きがいつくり活動「まちカツ！」

●総来場者数 91名（講座43人/防災さんぽ23人/地域支援WS8人）
○ 地域住民や市民活動団体が講師となり、自らの経験やスキルを活かして学びと交流の場を提供する「まちの生きがいつくり活動 まちカツ！」を開催しました。よりなん枠の[防災さんぽ][地域支援メニュー展開WS]を含む全23講座に延べ141名が参加し、多様な分野の活動について学ぶ機会となりました。
本事業を通じて、地域内の人的資源や活動を可視化し、顔の見える関係を築く基盤を形成することができました。また、講師・参加者双方にとって地域活動への第一歩を後押しする「入口」としての役割を果たしました。団体同士の情報交換や新たなつながりも生まれ、担い手の発掘や多様な世代が関わる持続的な地域づくりにつながることが期待されます。



やはぎかん 5/17 やはぎかん防災交流会

●総来場者数 50名
○ 災害時に迅速かつ適切な行動をとるためには、日ごろからの防災訓練が重要です。しかし、自学区以外の取組を知る機会は多くありません。そこで様々な防災訓練の事例を紹介・共有し、充実した訓練の実現を目的に「やはぎかん防災交流会」を開催しました。①矢作4学区②防災キャンプ(子ども☆横丁プロジェクト)③他自治体の防災訓練の事例紹介の後、「自団体に活かすには？」をテーマに意見交換をし、最後に全体発表を実施しました。
自助・共助の防災意識を高める上で、「防災訓練」というテーマは話しやすく、意識の高い参加者が集まったことで有意義な情報・意見交換の場となりました。「今回得られた知見をぜひ自地区で活かしたい」「防災意識を高める機会は繰り返し必要である」との声が聞かれ、満足度の高い交流会となりました。



りた職員の思いを伝える！コラム

岡崎三大祭りの一つ「神明さん」がつなぐ人と町

岡崎三大祭りの一つ、能見神明宮例大祭は「神明さん」と呼ばれ地元で長く親しまれているお祭りです。江戸時代中期からほとんど変わらない形で受け継がれ、昨年11月には岡崎市無形民俗文化財にも指定されました。紋服を身にまとい、ご神体を乗せた御神輿が町を巡る荘厳な御神輿渡御や、法被を揃えた町ごとの山車が練り歩き、随所で踊りが披露される曳回しは見どころのひとつ。夜の宮入では、地域の熱気が最高潮に達します。



神明さんは、単なる伝統行事にとどまらず、地域の人々が協力し合い、準備や運営を通じて新たなつながりを築く場でもあります。普段顔を合わせる事のない人たちが交流し、地域の結束を深める役割を果たしています。能見神明宮例大祭がこれからも子どもたちの笑顔にあふれ、未来を担う世代にも受け継がれることを心から願っています。神明さんがもたらす温かな絆と伝統の力が、地域の宝として輝き続けてほしいと思います。

鈴木紀勝（悠紀の里センター長）

3年ほど前から悠紀の里に赴任しています。明るく楽しいスタッフに囲まれ仕事ができることに感謝！ぜひ悠紀の里に遊びに来てください!!

お問合せ	よりなん	59-3600	むらさきかん	66-3066	市民活動センター	23-3114
なごみん	やはぎかん	33-3665	悠紀の里	57-5050	まち育て推進チーム	23-2888

まちのミカタ

Litaracy

2026.5 vol.139

発行・編集

特定非営利活動法人 岡崎まち育てセンター・Lita

〒444-0031 愛知県岡崎市梅園町3丁目6-6
TEL(0564)23-2888/FAX(0564)23-2898
http://www.okazaki-lita.com/
https://www.facebook.com/okazaki.lita/

配布

岡崎市図書館交流プラザ・Libra/岡崎市内の地域交流センター
会員宛へ郵送 等 ※会員登録をご希望の方は左記までご連絡ください。

配布協力

岡崎市役所各支所/岡崎市各市民センター/シビックセンター/
FMおかざき/杉くんの駄菓子屋/松應寺/cafeくらがり/



小グループに分かれ活動アイデアを共有する様子(座談会にて)

特集

水と森を未来へつなぐ 桑谷山からはじまる新たな取組

この冬、東三河では宇連ダムの水が枯渇し、取水制限や節水の呼びかけが続きました。岡崎市内でも給水車から供給された地域もあり、水の大切さを身近に感じた方も多かったのではないのでしょうか。そこで、今号は岡崎の「水」について知るきっかけをご紹介します。

岡崎市で供給される水道水の約76%は、市内の川や地下水という「地元の水(自己水)」でまかなわれており、全国的にも誇れる数字です。なかでも男川浄水場は市内で使われる水道水の40%以上を担っており、その水源域は市内東部に広がる森林です。つまり、岡崎の森を守ることは、岡崎の水を守る事そのものなのです。

この大切な水と森のつながりを未来へ紡ぐため、岡崎市上下水道局では「未来へつむぐ岡崎の水プロジェクト(通称:水プロ)」を進めています。2020年に水道関連企業と協定を締結し、現在は11社とともに水源林の保全と活用に取り組んでいます。間伐体験や水源調査などを通じて、森の役割への理解も着実に広がってきました。

現在は活動拠点を「桑谷山」に定め、より多くの人に関わる取組へと展開しています。今回の「水と森の座談会」では、これまでの取組を共有し、今後の方向性について多様な立場から意見が交わされました。本号では、その内容と今後の展開を紹介します。

水と森を未来へつなぐ 桑谷山からはじまる新たな取組

今回、りたは水プロの周知と活動の広がりを目的に、企業、行政、研究者、市民など多様な主体をつなぐ役割を担いました。これまでに培った関係性を活かした参加の声掛けをはじめ、座談会の進行、パネルディスカッションの調整、ワークショップの設計、事前打合せなどを行い、意見を出し合いやすい場づくりを支えました。また、アンケートの集計や意見整理を通じて、参加者の声を今後の活動に活かせる形にまとめました。こうした取組により、対話を実践へとつなぐ土台づくりを担いました。

●11/18「未来へつむぐ岡崎の水と森の座談会」を開催

企業、研究者、市民、行政職員など約80名が参加し、水プロの取組を広く知ってもらうとともに、今後の活動を多様な立場の人と一緒に考える場となりました。

東京大学大学院教授蔵治光一郎氏の基調講演では、森林の状態が水資源に与える影響について科学的な知見が示され、「森を守ることが水を守ることに繋がる」という理解を深める機会となりました。

続くパネルディスカッションは、桑谷山をモデルに森林を「負の遺産」から「楽しい資産」へ転換する可能性が議論され、水プロ企業・大学などの研究機関・森林組合などの森の専門家・行政のパネリストとともに、市民の連携の必要性が確認されました。

後半は参加者がグループに分かれ、「学ぶ」「活かす」「守る」「広める」という水源涵養に必要な4つの視点(右図)をもとに具体的なアイデアを出すワークを行いました。森の学校の開催や自然観察会、星空観察、探鳥会など、楽しみながら森に関わる企画が多く提案されました。また、こうした活動を通じて子どもから大人まで幅広い世代が関われることや、継続的な参加につながる工夫の必要性も共有されました。

座談会を通じ、桑谷山を単なる自然体験の場にとどめず、関わる人が増え、価値を生み出し続ける拠点として育てていく方向性が見えてきました。同時に、多様な主体が対話を重ねながら進めていくことの大切さが確認され、今後の具体的な取組へとつながる一歩となりました。



●2/6 連絡調整会議ワークでさらに具体化

座談会で出た意見を具体的な活動につなげるため、その後の連絡調整会議でも話し合いが行われました。ここでは主に企業の担当者が中心となり、桑谷山での活動内容や進め方について検討しました。

その結果、年間を通じた取組として、市民が参加できる「オープンディ」と、企業が中心となって行う「ワークディ」を組み合わせた方針が決まりました。森の調査や整備、成果の共有などを段階的に進めていくことで、無理なく関わり続けられる仕組みをつくらうとしています。また、学校との連携や親子で参加できる企画など、市民参加を広げるアイデアも出されました。こうした工夫により、単発ではなく継続的な活動につなげていくことが目指されています。

●これからどうする？

今回の取組を通して、水を守るためには森を守ること、そしてそれを多くの人と一緒に進めていくことの大切さがあらためて見えてきました。企業・行政・市民・大学がそれぞれの強みを活かして協力することが、これからはますます重要になります。今後は桑谷山での活動を積み重ねながら、関わる人を増やし、続けやすい仕組みを整えていきます。体験や学びの機会を広げ、水と森への関心を少しずつ着実に育てていくことも、大切な一歩です。

水は、毎日の暮らしに欠かせないものです。桑谷山からはじまる動きが地域全体・流域全体へと広がり、安心で安定した水の供給が未来へ紡がれていくよう、りたは多様な関係者をつなぎながら、継続した活動が市民の中に根付いていくことを目指し、これからも動き続けます。



活動拠点「桑谷山」とは？



山頂から見た三河湾方面

市の南東部に位置し、市街地からアクセスしやすく、豊かな自然と多様な生態系を有するフィールド。針葉樹と広葉樹が共存し、水源林としての機能だけでなく、学びや体験の場としても高いポテンシャルを持つ。また、駐車場やトイレなどの既存施設が整っており、再活性化の可能性が高い場所でもあります。降った雨は森にしみ込んだ後、山綱川→竜泉寺川→乙川、そして男川浄水場で水道水の原料となる。

まち育てレポート

QURUWAの10年を振り返る QURUWAシンポジウム開催

3月14日(土)、QURUWAの10年間を振り返るシンポジウムが開催されました。参加者は約130名にのぼり、市内の方々に加え、全国からQURUWAのまちづくりに関心を寄せる多くの方々にもご参加いただきました。

「QURUWA戦略」の前身である乙川リバーフロント地区まちづくりは、2015年7月のキックオフフォーラムで幕を開けました。今回のシンポジウムでは、その原点に立ち返ることを意識し、モデレーターに藤村龍至さん(RFA/東京藝術大学)、パネリストに内田市長や清水義次さん(アフタヌーンソサエティ)らを迎えるなど、当時の近い登壇者構成とし、会場前面にはQURUWA地区の大型模型を配置するなど、10年前と現在を対比する工夫がなされました。

前半では、藤村さんよりガントチャートを用いてこの10年の歩みが整理されました。初動期には、岩手県紫波町の「オガール紫波」を参考に、専門家や行政関連部署、まちづくり組織が連携する「デザイン会議」が設置され、Qの字を描く回遊動線「QURUWA」の構想や公共空間活用、社会実験の推進に大きな役割を果たしました。その後、籠田公園の再整備を契機として「QURUWA7町・広域連合会」が立ち上がり(本誌Vol.108参照)、地域自治の再生や民間による遊休不動産活用が加速しました。藤村さんは、こうした一連の取組は、公民連携によるまちづくりのお手本ともいえるものであり、その基盤づくりにりたが果たしてきた役割の大きさを評価いただきました。一方で、ジェンダーバランスの偏りや民間事業の資金調達、大規模開発との連携など、今後に向けた課題も共有されました。

りた・天野もパネリストとして登壇し、この10年の大きな変化として、地域自治・地域福祉が主要課題となったこと、額田をはじめとする岡崎市中山間地との連携の広がり、20～30代の若い世代の台頭、そしてQURUWAのまちづくりに魅力を感じる移住者・来街者の増加を紹介しました。

10年前、リバーフロント施策は期待の一方で懐疑的な視線もあり、行政と一部市民の間には緊張関係も存在していました。しかし、籠田公園をはじめ質の高い公共空間の整備とその活用、そして相互の信頼関係の醸成により、現在では市民や事業者の主体的な活動に行政が寄り添う形での公民連携プロジェクトが次々と生まれています。りたは今後もこうした流れを支え、QURUWAのまちづくりを推進していきたいと思えます。



▲パネリストのりた・天野、7町・広域連合会・筒井さん、次世代の会・佐谷さん[撮影:青木通香]



▲2015年のキックオフフォーラムと今回のチラシ

本シンポまでの1か月間、QURUWAシンポを「祭」に、空き店舗を「祭の会所」に見立てた「QURUWAのカイショ」に夜な夜な有志が集まり、寄贈されたお酒を飲みながらQURUWAのことを振り返ったり、自由に交流できる場として運営されました。

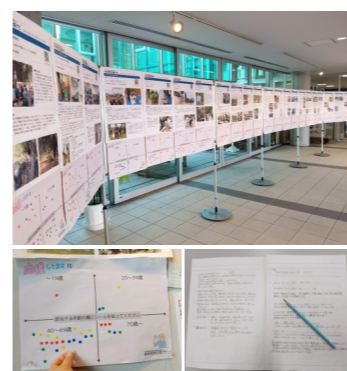
シンポ当日は、籠田公園でラジオ体操や清掃活動、若者に人気のマルシェ、旧ブティック「マルショウ」にてikiki朝市、乙川でもリパークリールにナイトマーケット、東岡崎の文化拠点CCでは近隣の風景の写真展など盛りだくさん。「QURUWAの豊かな日常」を目の当たりにした藤村さんは、10年の変化をしみじみと実感されていました。



▲ 嗣長でリパークリールに ▲ シンポ後はカイショで参加する藤村さんとアフタートーク

りた's Eye

Topics



おかざき公益ナビ巡回展を終えて

『おかざき公益ナビ』は、岡崎市内のモデルとなるような公益活動の事例を紹介するサイトです。2025年9月時点で23事業をご紹介してきました。このたび、市民のみなさんに「市内で行われている公益活動を直に知ってほしい!」との思いから、各地域交流センター及び図書館交流プラザらにて、紹介パネルの巡回展示を行いました。会場では、シールアンケートとメッセージノートを設置。6センター合計で950個ものシールを貼っていただき、また「こんなに素晴らしい取り組みがあるなんて知らなかった」「これからも続けてほしい」といったメッセージも寄せられました。

『おかざき公益ナビ』『巡回展』をきっかけに、公益活動への関心が広がり、事業への参加や新たな活動をはじめの方が増えることを願っています。

サイトは随時更新中。ぜひご覧ください ▶

